

高畑幸著

『在日フィリピン人社会
——1980～2020年代の結婚移民
と日系人——』

名古屋大学出版会 2024年 vi + 317ページ

つじもと としこ
辻本 登志子

はじめに

1980年代後半のバブル景気以降、若年のフィリピン人女性たちが興行労働者として、毎年約2万人から5万人来日した。それから30年以上が経過した今、彼女らの一定数は日本人との婚姻を経て定住し、日本で彼女らが築いた家族は孫世代にまで至る。これまで在日フィリピン人に関する研究やルポルタージュなどが、日英両言語で発表されてきた。一方、本書は1980年代後半から急増したフィリピンから日本への人の移動と定住を、ジェンダーや国際移住労働論、そして産業構造論や都市社会学など複数のディシプリンとアプローチから説明しようとする重厚な研究書籍である。扱っている資料やデータの質量と理論的貢献の見地からも、既存研究のなかで本書は突出していると評者は考える。

本書が研究対象とする在日フィリピン人移民とはおもに、日本人配偶者との婚姻を契機に日本に定住し家族を形成した結婚移民女性と、日本人の血縁をもつ日系人および彼女ら／彼らの次世代である。さらに結婚移民や日系人とは、著者の言葉を借りれば日比両国政府の労働政策以外の経路で来日し、その際に学歴や日本語能力、そして技能などの「人的資本」が問われなかったという共通点を有する人々である（17ページ）。

本書の全体像について要約すると、大きく分けて5つのテーマからなる。1つ目には結婚移民や日系人がフィリピンから日本へ移住し家族とともに定住する過程、2つ目には介護や産業現場での就労を通

じた日本社会への統合様式、3つ目には在日フィリピン人の集住都市における地域住民との軋轢や共生、4つ目には結婚移民女性の次世代やフィリピンから呼び寄せられた1.5世代の教育や国籍選択の課題である。5つ目には、日本で高齢期を迎えた結婚移民女性たちのフィリピンへの帰国や日本での老後という、全体的に個人のライフコースを意識した内容となっている。

以上5つのテーマは「生活構造論的民族関係」という枠組みによって連結され（34ページ）、これまで研究が不足していた日本社会における移民の統合過程に焦点が当てられたものとなっている。とりわけ在日フィリピン人と受け入れ社会が互いの差異をこえてつながる場の創出について考察するために、在日韓国・朝鮮人と日本人との関係形成について研究した谷富夫の「バイパス結合」概念を著者は援用している（34-35ページ）。ここでバイパスとは、地域社会における福祉などにまつわる課題をともに解決するために、民族や国籍、文化が異なる人々が差異をこえて個人として協働する場として説明されている（35ページ）。

紙面の都合上、全13章からなる本書のすべての内容について本稿で紹介することはしないが、ここでは本書の半数以上を占める結婚移民にかかわるテーマに限定し議論を行いたい。とくに、国際移住労働と国際結婚が有償／無償の再生産労働と結びつき、それが結婚移民の日本社会での統合様式に与えた影響に注目する。さらに本書の数多くある貢献のなかから3点に絞って述べるとともに、最後に評者が本書に対して抱いた問いや関連する議論を行いたい。

I 1980年代末からブームとなった興行労働とは何だったのか？

本書が提示する第一の論点として、結婚移民女性の多くにとって来日の契機となった興行労働とは、いったいどのような労働であったのかという議論から振り返っておきたい。まず前提として著者は興行労働について、客との疑似恋愛という「親密さの商品化」を伴う労働であり（57ページ）、フィリピン人女性たちに大きなリスクを負わせるものであったと論じている。そのリスクのひとつとは日本人男性との間に産まれた婚外子と、その子どもを養育する

ためにフィリピン人女性たちにのしかかった経済的・心理的負担であった(61ページ)。また興行ビザは最長6カ月までしか有効期間がなかったため、女性たちが日本滞在中に出産することがそもそも不可能なシステムであったことを指摘している(60ページ)。つまり、フィリピン人女性たちは店の売上げを伸ばすために、日本人男性客に親密さを切り売りさせられてきたにもかかわらず、その結果としての婚外子養育はすべて彼女らの自己責任に押しつけられてきたことを批判的に考察している。

これまで日本の興行労働に関する議論としては、人身取引をめぐる論争やフィリピン人女性たちのエージェンシーを強調したものがあった[Parreñas 2011]。しかし興行労働の議論における本書の貢献は散発的に発生した人身取引のみならず、親密さの商品化を伴う労働がフィリピン人女性や彼女らの子世代にまで及ぼした影響を長期スパンで考察したこと、そしてそれが彼女らの日本定住過程とも連動していることを複合的に示した点にある。

実際、本書を読み進めるなかで評者が受けた印象は、フィリピン人女性が日本に定住する過程において興行労働者であった過去が彼女らや彼女らの次世代にいかにか大きな影響を与えてきたのかということである。たとえば興行労働がフィリピン人女性や日本社会にもたらした影響について、著者はフィリピン人女性とその子どもたちの新たな来日機会の創出と、一方で彼女らの子世代にも搾取や暴力の連鎖をもたらしたことを示唆する。まず外国人女性が婚姻関係にない日本人男性との間に生まれた子どもに日本国籍を取得させる場合、2009年以前までは父親による出生前認知が必須であった。その後国籍法の改正により、要件を満たせば出生後の認知であっても婚外子の日本国籍取得が可能となった(61ページ)。国籍法の改正は日比婚外子とその母親であるフィリピン人女性が来日し就労する道を開いたものの、母子の日本行きを手引きした業者による人身取引や労働搾取[藤本 2015]、そして2008年の国籍法改正後に日本国籍を取得し来日した新日系人の労災や事故死などを引き起こした(62ページ)。このように本書は、結婚移民女性の生活史から興行労働が彼女らに与えたさまざまなインパクトについて丁寧に描き出すことに成功しており、以下で述べるように彼女らの日本定住過程と興行労働との接点を鮮

明にあぶりだしている。

II 興行労働と介護労働の連続性と再生産領域から派生した日本社会との「バイパス」構築

第二に評者が考える本書の貢献は、2000年代以降に結婚移民女性が転向した介護職などにおいても、かつての興行労働者としての彼女らの経験が連続性を作り出していることを明らかにした点である。彼女らがかつて接客をとおして身につけた日本語会話能力や歌・ダンスなどの技能は、介護労働者として施設利用者とコミュニケーションをとり、施設内のレクリエーション活動を先導するためにも介護施設から重宝されたという(93ページ)。

もう一方では結婚移民女性にとって介護職とは、社会的評価や家族からの尊敬を得ることにより、フィリピン人女性に対するネガティブなラベリングを克服することができる仕事であった(93ページ)。またインタビュー資料からは、結婚移民女性が日本社会で自信と誇りをもち生きていくために介護職が必要な職業であったことが読み取れる(83-86ページ)。もちろん近年ではフィリピン人結婚移民女性の高齢化や日本語での高度な読み書きが要求される介護職の専門職化により彼女らの介護職離れが起き始めており、介護職が結婚移民女性にとって必ずしも理想的な職業ではなくなってきていると著者は指摘する(95ページ)。

しかし著者は結婚移民女性がこれまで興行労働者や介護労働者として働き、そして家庭においては家事・育児・高齢者介護などを一手に引き受けてきたことから、彼女らが「日本において『日本人』をケアする」有償／無償の再生産労働を担ってきたと指摘する(276ページ)。そして「水商売の女性」という固定化されたフィリピン人女性像を克服するために、家庭内の性別役割を受容し親族や地域社会から「よい嫁、よい母」として受け入れられるよう結婚移民女性は努力を重ねてきたと著者は分析している(79ページ)。もちろんこれはフィリピン人女性たちが日本社会から押しつけられてきたイメージを払拭するための彼女らの戦略であるが、東北地方の結婚移民女性に関する研究を行った李[2023]が指摘するように、この戦略は結果的によき嫁・妻・母として彼女らを家庭という再生産領域へさらに強固

に縛りつけることにもつながった。

一方本書の興味深い点や貢献は、結婚移民女性の日本における家族・親族関係が女性たちを家庭だけに閉じ込めるのではなく、それが地域社会や日本人をおもな構成員とする団体やネットワークに接続する役割を果たしていることを実証的に明らかにしたことにある。これが本書において第三の重要な論点であると評者が考えた、結婚移民女性の日本社会への定住要因としての家族・親族関係であり、生活構造としての結婚生活や子育てが彼女らをPTAやママ友、そして国際交流協会や英語講師の職などへ接続したとする議論である。つまり結婚移民女性は家庭のなかで実践的に日本語会話能力を培い、それが地域社会や日本人とのバイパス形成を容易にしたと著者は分析する(277ページ)。

他方、移民の社会統合政策が不在の日本において、結婚移民女性にとっては家族が重要な居場所であり(203ページ)、『日本人』をケアする役割』を担う結婚移民女性への日本社会の需要も彼女らの定住を促したとする(276ページ)。したがって国籍や言語が異なる女性たちを家族に招き入れた要因が日本における「ケアの欠乏状態 (Care Deficit)」にあったと仮定すれば(276ページ)、家族のケアを担う結婚移民女性の需要も、彼女らと日本社会のバイパスを作り出す根本的な構造として機能したことが読み取れる。

Ⅲ 「バイパス」はジェンダーとエスニシティによる権力構造とどのような関係にあるのか

評者は、在日フィリピン人移民の社会統合を論じる上でバイパス概念が著者の主張を説得力のあるものにしていてと考えるが、本書におけるバイパス概念が示すさらなる課題についても最後に論じておきたい。日本人と移民をつなぐバイパスは、相互が抱える人手不足などの問題や移民の剥奪状態、そして家族をもつことや趣味などの「楽しみや喜びの共有」をとおして形成されると著者は述べている(285ページ)。評者はバイパスを、国籍やエスニシティそして社会的地位の差異による硬直した関係性に風穴を開けることにより、日本人と移民を対等な個人としてつなぎ共生を可能にするものであると理解した。たとえば第6章ではフィリピン人の集住地域で

ある名古屋市中区栄東地区において、町内会が実施する清掃ボランティア活動に非正規のフィリピン人男性移住労働者も参加し、地域社会が抱える課題に構成員の属性をこえて取り組もうとする実践が紹介されている(173ページ)。

しかし清掃活動参加への動機づけを「超過滞在の免罪符」として捉えた非正規のフィリピン人男性移住労働者と町内会役員との間に意識のギャップが存在したように(172-173ページ)、国籍や法的地位の違いは時にバイパス維持の障壁になることが予想された。つまりいつ出入国管理局から摘発を受けるかもわからない状況のなかで、息をひそめて暮らさなければならぬ非正規移住労働者とそのような心配とは無縁の日本人住民との間には、圧倒的な市民権上の差異が存在する。このことから、法的地位や行使できる権利の違いは、バイパスの維持において果たして何の弊害ももたらさないのか疑問を抱いた。

くわえて結婚移民女性にとってのバイパスとは、国籍やエスニシティ、ジェンダーなどによる権力構造とどのような関係にあるのだろうか。近年の研究では、日本社会に埋め込まれたジェンダー規範や夫婦関係における権力構造が、結婚移民女性たちの人生設計における多様な選択肢を制限していることや[新倉 2024]、結婚移民女性たちが規範的な家族役割を果たすことが地域社会における彼女らの受容要件になるなど、結婚移民女性の日本社会への統合がジェンダーとエスニシティによる権力関係に水路づけされていることが指摘されている[大野 2022, 202; 李 2023]。つまり家族や地域社会に内在する家父長的關係性は、結婚移民女性たちを受入れ社会に包摂する強固な社会構造として機能しつつも、一方で彼女らの自主性や選択を阻む足枷にもなってきたことを意味する。

もちろん本書を読むかぎり、このようなジェンダーとエスニシティによる力の不均衡について、著者が言及していないわけではない。日本人家族や親族から差別を受け社会統合の機会から排除されてきた結婚移民女性たちのエピソードや(277-278ページ)、他方でフィリピン人女性と日本人男性との間に産まれた婚外子の日本国籍取得を求めるフィリピン人母子たちの訴えなど(61ページ)、ジェンダーやエスニシティ、そして法による権力構造に翻弄されながらも、それを変革しようとする当事者たちの

働きかけについてもふれている。また著者は結婚移民女性たちの脆弱性を乗り越える回路が彼女らの生活構造自体に存在し、日本社会とのバイパス形成が実現したことを指摘する（191 ページ）。

しかしバイパスは受入れ社会と移民による双方向性により形成され効力を発揮するとすれば、移民と受入れ社会の間に存在する権力構造を抜きにしてそれについて語ることは難しいと考える。そうであるのならば、移民と受入れ社会の間に存在する権力関係はバイパス形成にどのような影響を及ぼしているのだろうか。ジェンダーやエスニシティによる権力の勾配がむしろバイパスの形成を促進させると同時に、国籍法改正の取組みにみられたような国籍やジェンダーによる硬直した関係性を変革する可能性をも含んでいるのだろうか。バイパスが内包する複雑な力関係が結婚移民女性を単に「かわいそうな移民女性」（33 ページ）にするだけでなく、彼女らの社会における潜在能力や可能性を引き出す効果を生み出しているとすれば、バイパスが移民の社会統合において内包する逆説的かつ多面的な機能についての、本書におけるもう一步踏み込んだ議論が必要であったのではないかと評者は考えた。

おわりに

以上が評者の気になった点であるが、多くの調査対象者の母語であるフィリピン語を著者も用いて丁寧な聴き取りを行い、心情の機微を含む豊かな語りをアカデミックな議論に昇華させていく過程は実に鮮やかであり、質的研究方法のお手本として学ぶべきところが多かった。そして結婚移民女性以外にも、本書は国際労働移動や家族移民、移民の労働市場へ

の編入など、広く移民の社会統合や日本社会における共生について関心をもち研究する読者にタイムリーな議論を提供している。アカデミアの枠にとらわれず、移民と受入れ社会との関係構築のために日々試行錯誤し実践する人々にも、読み継がれていく良書であることは間違いない。

文献リスト

〈日本語文献〉

李善姬 2023. 『東北の結婚移住女性たちの現状と日本の移民問題——不可視化と他者化の狭間で——』 明石書店.

大野恵理 2022. 『「外国人嫁」の国際社会学——「定住」概念を問い直す——』 有信堂高文社.

新倉久乃 2024. 『在日タイ女性の高齢期と脆弱性——トランスナショナルな社会空間と埋め込まれたジェンダー規範——』 明石書店.

藤本伸樹 2015. 「人権の潮流——日本に移住する JFC（ジャパニーズ・フィリピン・チルドレン）母子をめぐる搾取——」 『国際人権ひろば』（121）.

<https://www.hurights.or.jp/archives/newsletter/section3/2015/05/jfc.html>

〈英語文献〉

Parreñas, Rhacel Salazar 2011. *Illicit Flirtations: Labor, Migration, and Sex Trafficking in Tokyo*. Stanford University Press.

（立命館大学国際関係学部准教授）